

異文化の受容形態としての外来語・和製英語の問題 — 「ハイキング」と「バイキング」の言語文化学 —

林 伸一

1. はじめに

林(2011)は、日本語の中に見られる NHK、JR、IT などのアルファベット表記の語を取り上げ、異文化受容形態としての外来語・外国語の問題を論じている。そこから明らかになってきたのは、ローマ字が日本語の補助表記としての守備範囲を超えて、外国語が日本語の文脈の中に入り込み、日本語の表記形態に変化を及ぼしている現状である。

本稿では、「ハイキング」と「バイキング」といったカタカナ表記の日本語の言語文化的背景について、異文化受容の観点から考えてみたい。

2. 日本語のミニマルペアについて

「ハイキング」と「バイキング」といった一カ所だけ発音が異なることにより、まったく指示対象と語義が違ってしまふ語のペアをミニマル・ペア (minimal pair) と言う。

ミニマル・ペアは、最小対語 (さいしょうつうご)、最小対 (さいしょうつう)、最小対立 (さいしょうたいりつ) のことで、ある言語において、語の意味を弁別する最小の単位である音素の範囲を認定するために用いられる。つまり、1 点のみ言語形式の違う 2 つの単語のことをいう。

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/ミニマル・ペア>)

日本語の「ハイキング」と「バイキング」は、「ハ」と「バ」が対立しており、ミニマル・ペアである。原語の <hiking> と <Viking> を見ても [h] と [v] が対立しているミニマル・ペアとなっている。さらに <hiking> が普通名詞であり、<Viking> が固有名詞となる。「ハイキング」と「バイキング」とを留学生が言い間違えたりするだけでなく、日本語母語話者も文章中で読み違えたりすることから、この二語の弁別が必要となる。本稿では、この二語のルーツを明らかにしながら、指示対象と語義の違いを明かにしていきたい。

3. 「ハイキング」について

「ハイキング」<英語: hiking>は、健康のため、あるいは知らない土地を見聞したり、自然の風景や歴史的な景観を楽しむために軽装で、一定のコースや距離を歩くことをいう。「ウォーキング」ともいい、近年は高齢者の健康維持<health promotion>のために推奨されている。小高い丘や山を越えたり、その中腹を横切るといったコースもあり、山歩きと一部その活動は重なる部分もある。なお、ハイキングをする人を「ハイカー」という。

なお、食事が主な目的となる場合は、ハイキングではなく「ピクニック」となる。

(参照: <https://ja.wikipedia.org/wiki/ハイキング>)

「ハイキング」と「ウォーキング」「ピクニック」などが類義語として隣接している。

3-1. 「ハイキング」と「ウォーキング」

「ハイキングウォーキング」という吉本興業東京本社（東京吉本、厳密には子会社のよしもとクリエイティブ・エージェンシー）所属のお笑いコンビがあり、2001年からラ・ゴリスターズのメンバーの1組（通称ハイウォー）として活動しているようである。

「ハイキングウォーキング」は、主にコントをするが、漫才や一発芸なども披露する。

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/ハイキングウォーキング>)

ここでは、お笑いコンビの固有名詞としてではなく、「ハイキング」と「ウォーキング」という普通名詞の差異を検討したい。

ウォーキング<英語：walking>は、散歩、歩くことによって健康増進を目的とした運動である。

(参照：<https://ja.wikipedia.org/wiki/ウォーキング>)

「ハイキング」と「ウォーキング」の両者の共通点は、「歩くこと」で、前者の目的は「行楽、観光」であるのに対して後者は「健康維持、体力増強」である。漢語に置き換えるなら、前者は「徒歩旅行」、後者は「歩行運動」とでもなるであろうか。「ハイキング」は「歩く行為」の前後または途中で乗り物での移動が含まれる可能性があるのに対して、「ウォーキング」の場合は乗り物での移動は含まれない。

「ウォーキング」が「知らない土地を見聞したり、自然の風景や歴史的な景観を楽しむため」という目的が加わるために後述の「バスハイク」などという言葉が出てくることとなる。「ウォーキング」は都会の中でもできるのに対して、「ハイキング」は都会から離れて、自然に親しむ点異なる。

あえてカタカナ表記しない場合は、外来語の「ハイキング」が和語で「山歩き」となり、「ウォーキング」が漢語の「歩行運動」「散歩」または和語の「歩くこと」となるであろう。

「山歩き」と「散歩」では、装備の面でも山野か平地かという点でもイメージの差がある。やはり共通する点は、「歩くこと」であるが、英語の「ウォーキング」をさらに詳しく見てみると、「ノルディックウォーキング」<nordic-walking>や「競歩」も含まれる。

(下図版 <http://wakuwakutuhan.jp/15.html>)

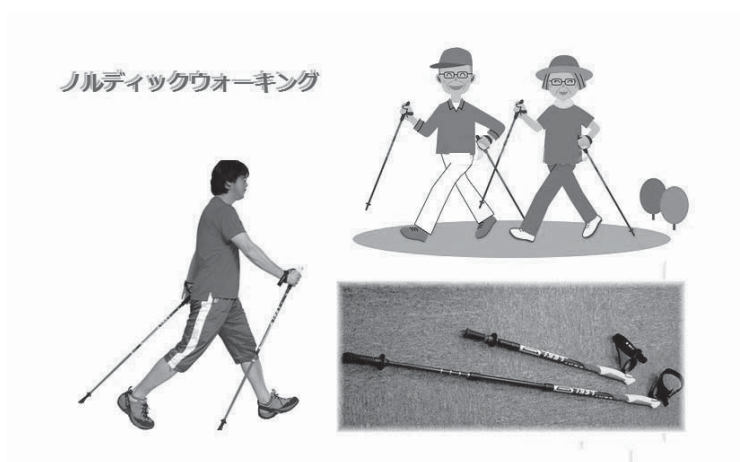


図1. 紅葉狩り

「ノルディックウォーキング」は、2本のポール（ストック）を使って歩行運動を補助し、運動効果をより増強するフィットネス・エクササイズの種類である。もとは、クロスカントリーの選手が、夏の間の体力維持・強化トレーニングとして、ストックと靴で積雪のない山野を歩き回ったのが始まりである。北欧ではスキーウォーキング、ポールウォー

キング、フィットネスウォーキングとも呼ばれる。日本国内ではポールを突いて後方に押し出して推

進力にするものをノルディックウォーキング、前方に突いて歩行を補助するものをポールウォーキングやノルディックウォークと呼び、ポールウォーキングやノルディックウォークは本来のノルディックウォーキングとは区別される。(参照：<https://ja.wikipedia.org/wiki/ノルディックウォーキング>)

なお、2本のポール(ストック)を使う点については、登山にもトレッキング用のポールを用いる類似のスタイルがあるが、ノルディックウォーキングが比較的緩やかな山野のフィールドでフィットネス運動を主目的として行なわれるのに対して、トレッキングを目的とする場合はよりハードな位置付けになっている。それに合わせて、使用するポール自体も衝撃吸収性や強度などを含めて設計が異なる。(参照：<https://ja.wikipedia.org/wiki/ノルディックウォーキング>)

競技としてのウォーキングが「競歩」(きょうほ)である。

「競歩」は、トラックあるいは道路上で決められた距離を歩く速さを競う陸上競技種目で、競技会では50kmWのように最後にW(walk)を付けて表記する。

「競歩」は、陸上競技種目で唯一の判定種目で、ルールに沿った歩形(フォーム)を維持しながら歩かなければならず、順位やタイムだけでなくルール(失格)との戦いがある。競歩のルールは幾度か改正がされている。現在、男子20km・男子50km・女子20kmがオリンピックの競技種目で実施されている。(参照：<https://ja.wikipedia.org/wiki/競歩>)

3-2. 「ハイキング」と「ピクニック」

「ピクニック」<英語: picnic>は、屋外に出て野山や海岸などの自然豊かな場所に出かけていき、食事をする。日本語の古語では「野掛け・野駆け(のがけ)」という。

「野掛け(野駆け)」には、次のような二つの場合がある。

① 花見やもみじ狩りなど、山野を歩き回って遊ぶこと。野遊び。野掛け遊び。

「晒の手巾(てぬぐい)は女中衆(し)がかぶって一に出る/滑稽本・浮世風呂 4」

② 野山で行う茶の湯。野点(のだて)。

三省堂『大辞林 第三版』

「野駆け」と馬偏の「駆け」を用いて表記すると野原を馬で駆けるイメージを想像しがちであるが、「山野を歩き回って遊ぶこと」が元々の意味であったようだ。さらに「野掛け振る舞ひ(のがけぶるまい)」という表現があり、「野掛けで、用意した飲食物を皆に振る舞うこと。また、その飲食物」の意であったことから、英語の<picnic>に相当する。

彦山芸術生活研究所代表の清原健彦氏は「日本では野山で遊ぶという意味の『野掛け』という言葉があり、『野点(戸外での茶席)』、『鷹狩』といった武士階級の狩猟との関連を考察するのも楽しい」と述べている。

(<https://www.hikosanart.com/artpicnic/>アートピクニックとは)

人間は、建物を作り、この中で生活の様々な用を済ませる。しかし「ピクニック」では、こういった建物から出て、戸外で日常的な活動を行うもので、その延長上には本格的な野外生活が考えられるが、「ピクニック」ではそこまで生活の長い時間を戸外で過ごすことは前提とせず、食事とその前後の軽い行楽のみを目的とする。

食事では、主に弁当・サンドイッチ・果物などの運搬性の良い食べ物を持って行き、自然に親しみながら遊ぶ。これらの遊びはスポーツなどの本格的なものではなく、軽く体を動かす程度(散歩を含



む) で、これは専ら「食後の軽い運動」程度にとどめられる。

似たような行楽には「ハイキング」があるが、こちらは「てくてく歩く」という意味あいがあり、行楽地まで徒歩で移動することのほうに主体がある。ピクニックではその移動の過程は重要視されず、より純粋に戸外で食事や行楽することに重点が置かれている。

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/ピクニック>)



<Free picnic clip art pictures clipart images 2 clipartcow>

つまり「ハイキング」が、基本的に「歩いてどこかへ行く」ことが目的であるのに対して、「ピクニック」は、お弁当を食べるのが目的で、別に歩かなくてもいい。日本語では二語を明確に分けないこともあるが、英語の場合には、<picnic>と

<hiking>が区別されているようだ。ただし、海外では、みんなでバラバラに車で公園などについて、ケータリング<catering>の食事をするような<picnic>と呼ばれる集会もあると聞く。政治家の演説会+資金集めのパーティーとしての<picnic>がよく行われているという。

ハンガリー社会主義労働者党の改革派が民主化を進めていたハンガリーでは、1989年8月19日に、ハンガリー・オーストリア国境地帯に属するショプロンで汎ヨーロッパ・ピクニックが開かれた。ショプロンが選ばれたのは、この町がハンガリーから飛び抜けて、オーストリア領に食い込むような形になっており、三方をオーストリアに囲まれていたため、比較的オーストリアに脱出しやすいと考えられたためである。(詳細は省略)

続々と東ドイツ市民が到着し、600人以上が国境を越えた。こうして真夏の週末のピクニックは成功裏に幕を閉じた。(https://ja.wikipedia.org/wiki/汎ヨーロッパ・ピクニック)

この集団亡命は「ピクニック事件」と呼ばれているが、この事件が「ベルリンの壁」崩壊のさきがけとなったとも言われている。(参照:『ルーマニア革命は「市民蜂起に便乗した宮廷クーデター」だった』 恵谷治 http://www.sukuukai.jp/resuponse/category_34/)

日本の「花見」や「紅葉狩り」も、近場で職場の宴会が中心の飲み会の場合もあるが、家族や子供会などで行く、お弁当を食べながらのレクリエーションとしての「花見」や「紅葉狩り」は、そのまま<picnic>の範疇に入る。かつての「野掛け・野駆け」も同様である。

現代でも「園遊会」<garden party>という形で、政治家や著名人が招待されての集まりが催され、茶の湯の席が設けられる「野点」が行われたりする。しかし、家族や友人単位でのインフォーマルでカジュアルな「ピクニック」<picnic>と大がかりでフォーマルなイベント形式で行われ、晴着で参加する「園遊会」とでは性格と規模が異なる。

3-3. 「ハイキング」と「ワンダーフォーゲル」

「ワンダーフォーゲル」<ドイツ語: Wandervogel>は、1896年にベルリン近郊のシュテューグリッツのギムナジウムの学生だったカール・フィッシャーらがはじめた青少年による野外活動である。19世紀後半のドイツにおいての急激な近代化に対する広い意味での自然主義の高揚を背景としている。はじめ、フィッシャーらは男の子ばかり郊外の野原にでかけてギターを弾き、歌を歌った。

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/ワンダーフォーゲル>)

郊外の野原にでかけてギターを弾き、歌を歌ったという点では、「ハイキング」と同様の活動である

と言ってもよいだろう。

「ワンダーフォーゲル」は、当初男の子ばかりの活動であったり、やがてグループの緑の旗が出来たり、男の子は半ズボンに、ニッカーボッカーのようなスタイルになっていった点が、参加スタイルが自由で画一化されていない「ハイキング」とは異なる点であろう。

やがて女の子も参加するようになった。＜Wandervogel＞は直訳すれば「渡り鳥」の意味である。1901年運動のメンバーの一人、ヴォルフ・マイネンが運動の中心が歌を歌うことだったので、「ワンダーフォーゲル」と名づけたとされる。鳥、つまりさえずるという意であると同時に、社会の固定された規範から自由でありたいという願いが込められている。

その思想の一部を受け、日本でも主に大学のクラブ・サークル活動の一環として野外活動を主とする活動が発展した。これらの活動も「ワンダーフォーゲル」と呼び、日本語では「ワングル」と短縮されたりする。日本では、ハードなトレーニングを行なう山岳部と対比して、「ワンダーフォーゲル」を山岳部の亜流（第2山岳部）と捉える向きがある。

（参照：<https://ja.wikipedia.org/wiki/ワンダーフォーゲル>）

部外者からは、山岳部と「ワングル」の区別がつきにくく、どちらも登山部のようなものという印象がある。「ハイキング」より「ワングル」の方が、重装備でハードなイメージがあが、「ワンダーフォーゲル」の当初は、「ハイキング」と大差なかったであろう。

1910年代にはドイツ全土に広がるが、1914年第一次世界大戦に入り、ワンダーフォーゲルは、戦争忌避的な個人主義、個人の享楽主義のように見られ、好ましくないとの批判が出てくるようになった。関連の団体、グループ13団体が、ホーエン・マイスナーに集合し、「自由ドイツ青年」という団体を結成する。戦争の進展と共に運動の一部はナチ化し、のちヒトラーユーゲントに吸収されて、その姿を消した。

日本には第二次世界大戦前のドイツとの国家的友好関係とその影響の元に、1933年（昭和8年）文部省内に「奨健会ワンダーフォーゲル部」が設けられ、国による健全な青少年運動として宣伝と普及が開始された。それらに触発され1935年（昭和10年）に発足した立教大学ワンダーフォーゲル部が日本での最初の学生団体とされる。その後、戦争をまたいで高度経済成長と登山大衆化を背景として各地の大学に広く設立されるに至った。

（参照：<https://ja.wikipedia.org/wiki/ワンダーフォーゲル>）

3-4. 「ハイキング」と「バスハイク」

「バスハイクとは何か？」と質問されたら「バスに乗ってハイキングすること」という答えになるであろうが、よく調べてみると、それほど一般的な用語ではないようだ。

一般的でないというより、「バスハイク」は英語で、＜a bus trip＞または＜a bus excursion＞というので、「バスハイク」は和製英語的表現と言ってよいであろう。

日本では、バスに乗ってお出かけするときに「バスハイク」という言葉を使っている場合があるが、「バスツアー」との違いはどうなるであろうか。「バスツアー」の方が宿泊を伴ったり、より遠くへ出かけるような大がかりなイメージがあるのに対して、「バスハイク」の方は、もっと気軽に「ちょっとお出かけします」というニュアンスであろう。

「バスツアー」＜bus tour＞は、バスで移動する旅のことで、「日帰りバスツアー」などという使われ方をするので、必ずしも「宿泊を伴う」とは限らない。

西鉄旅行では「福岡（博多）発着のバスツアーならバスハイク。お手軽な日帰りバスツアーも盛り

だくさん！東京発バスツアー（日帰り・宿泊）はこちら>>」という案内を出している。
(<https://www.nishitetsutavel.jp/bushike/>)

では「ハイク」単独で、日本語の文中に用いられることはあるだろうか。

「ハイキング」の基となる語は「ハイク」<hike>であるが、動詞としての<hike>は、そのまま日本語の中には受容されにくく、動名詞の<hiking>の方は、そのままカタカナ語の「ハイキング」として受け入れられている。ただ単に「てくてく歩きまわること」や硬いイメージの漢字熟語「徒歩旅行」のことをより軽快でおしゃれなイメージで言う言葉として「ハイキング」が用いられるようになったと考えられる。

「ハイキング」のような外来語は、和語でも漢語でも言い表しにくい語の隙間のニュアンスを埋める語として、日本語の中に取り入れられ、定着したものと思われる。それ故に「ハイキング」を日本語母語話者が日本語に置き換えようとしても、和語にも漢語にもしにくい。あえて和語で言い表すと「物見遊山」、漢語では「漫遊」とでもなるだろう。

『世界大百科事典』によると、明治時代には「観光」という言葉も用いられるようになったが、明治以前から用いられていた「<物見遊山（ものみゆさん）> <漫遊> などという語と比べると、観光は格調の高い言葉とされた。ただし、この言葉の現在の語感、むしろ低俗な響きを持つ場合も多い」とされる。時とともに「価値の低減」が見られる。

3-5. 「ハイキング」と「ヒッチハイク」

「ヒッチハイク」<英語: Hitch hike>とは、通りがかりの自動車に（無料で）乗せてもらうこと。この方法で旅することをヒッチハイキング<Hitchhiking>、旅行者はヒッチハイカー<Hitch hiker>と呼ばれる。(<https://ja.wikipedia.org/wiki/ヒッチハイク>)

徒歩旅行に疲れて、「ヒッチハイク」する場合もあるだろうが、日本ではあまり見かけられない。それは、「ヒッチハイク」が犯罪に結びつきやすく危険であることと日本では比較的公共交通機関が発達しているためであろう。

多くの場合、通りすがりの自動車に無料で乗せてもらう行動を指す。交通量の多い道路の脇に立ち、腕を肩から水平方向に目一杯伸ばし、親指を突き立てた「サムズアップ」👍<thumbs up>を取ることがヒッチハイクの意味表示とされている（決して人差し指を立ててはいけない）。行き先（目的地）を大きく書いた紙や、ボードを胸や腹あたりに掲げながらやることも多い。

乗せて貰ったからといって寝てしまったり、運転手の迷惑になる行為をすることは厳禁で、ヒッチハイクの最低限のマナーとされている。

ヒッチハイクをする側の理由としては、旅行費の節約や冒険をしてみたい、などがあげられる。(参照：<https://ja.wikipedia.org/wiki/ヒッチハイク>)

ヒッチハイカーを乗せてみようと思うドライバー側の動機としては、例えば、困っている人を見るとふと人助けしたくなる心情、若者（特に所持金が少なそうな若者）を応援してあげたいという年配者の気持ち、自分もヒッチハイクをしたことがあり一種の恩返し（恩送り）として乗せる、独りで長距離運転している退屈を紛らわしたい気持ち、などである。長距離トラックなどの運転手の好意で成立する場合も多い。

かつてはヒッピー文化の影響で、世界中でヒッチハイクによる旅行を行う若者が相当多数いたが、その後アメリカ合衆国などではヒッチハイクを装った強盗事件が多発したため、現在では法律で禁止されている。現在では世界旅行で縦横無尽に移動する手段としてヒッチハイクを選択する文化は以前

に比べると衰退傾向にある。だが現在でも、特に禁止はされていない国や認められている国は多く、それぞれの国の事情に任されている。(参照：<https://ja.wikipedia.org/wiki/ヒッチハイク>)

4. 「バイキング」と「バイキング料理」「バイキングレストラン」

『ブリタニカ国際大百科事典』によると「バイキング」は、8世紀末から11世紀中頃までヨーロッパ、ロシアに侵入、略奪と商業によって大きな影響を与えた北方ゲルマン族の総称である。初めは小規模で一時的な略奪行為であったが、次第に国王みずから統率する大船団による略奪遠征、あるいは妻子を伴った植民、領土獲得となり、中部イングランド、北フランス（ノルマンディー）は主としてデンマーク系バイキングから成る自治地域となった。

バイキング<Viking>が、海賊イメージが強く、海上からヨーロッパ各地を侵攻した北方ゲルマン族の通称であったのに、なぜ、それが日本では「バイキング料理」の略称となったのであろうか。

「バイキング料理」と言えば、各種の料理を大皿盛りにしてテーブルに並べ、各自取り分ける様式の料理のことである。

小学館『日本大百科全書(ニッポニカ)』の解説によれば、「日本特有の宴会用料理で、一定料金で好みの品を食べほうだいという形をとり、ホテルやレストランで供される。これは、スウェーデン料理のスモーガスボード<smrgsbord>に由来している。これは、料理を持ち寄っての会食に始まり、16世紀のころから定着した宴会料理である。

日本では、このスモーガスボードの様式に、北欧で有名なバイキング<Viking>の名をつけて、バイキング料理とした。

河野友美氏によると、最初に供したのは帝国ホテルで、1958年（昭和33）である。料理は冷製、温製を取り混ぜ、また、魚料理、肉料理、デザート、飲み物まで広く取り合わせる。洋風料理以外に中国料理を用いた中華バイキング、和食バイキング、ホテルの朝食バイキングやケーキバイキングなどもある。食するときのマナーとしては、皿には食べられる量をとること、料理の味が混ざらない程度に取り分けることである。

「スモーガスボード」は、スウェーデンの代表的料理とされているが、なぜ日本では「スモーガスボード」と言わずに「バイキング料理」と言うようになったのであろうか。ちなみに「スウェーデン人の食生活は一般に簡素なものだが、スウェーデン料理の代表格として知られるスモーガスボードは、いわばこの国の海の幸、山の幸の集大成ともいえる豪華なもの」とされる。(『日本大百科全書(ニッポニカ)』の[角田俊]解説より)

スモーガスとは、バターを塗ったパンの意で、デンマークの有名なオープン・サンド、スミョルブロイと同義である。スウェーデンでも一般家庭ではパンにありあわせの料理をのせたスモーガスはよく食べられるが、スモーガスボードはかならずしもパンの上にはのせない。ちなみにボードは食卓を意味する。冬ごもりの食料を持ち寄って食べたのが始まりとする説、バイキングたちが好んで食べたとする説などあるが、定説はない。ただ言えることは、本来はもっと簡素な、あるいは粗野なものであったらろうということである。(同上[角田俊]より)

角田俊氏の<smörgåsbord>(スウェーデン語表記)を「バイキングたちが好んで食べたとする説」が元となって、日本では「バイキング料理」となって、日本中に広まり、「バイキングレストラン」が続々とできていったとも考えられる。

4-1. 「バイキング料理」と「ビュッフェ」

フランス語で、元々は「飾り棚」という意味で、上段は棚、下段に扉のつく飾り棚が「ビュッフェ (buffet)」と呼ばれていた。

ここにちょっとした料理を置いて、立食で食べるスタイルが流行ったらしく、「ビュッフェ⇒好きに取る⇒立食」という意味で使われるようになったとされる。

ビュッフェだけでなく、カウンターでも同じようなことをしたので、列車の簡易食堂やバーのカウンターで提供される形式の食事の意味するようになり、背もたれがない椅子（スツール）<stool>に座って食べるスタイルもある。

よってビュッフェは、「自分で料理を好きに取って立食する」というスタイルの食事となる。「食べ放題」という意味はないが、結果的に食べ放題であることは多い。

日本でのビュッフェは料理を取る時は立って取るが、食べる時は座ることがほとんどとなる。日本の立食式のビュッフェスタイルのパーティーなどで、料理の並ぶテーブルにピタリと陣取り知人と食べながら談笑するという光景を見かけるが、他の参加者が料理を取りにくくなり、マナー違反となる。まして、自分の好きな料理のところに椅子を持ってきて座り、そのまま食べ続けるというのは論外である。

「バイキング料理」の場合のマナーも同様である。「バイキング」が海賊イメージを伴っていたとしても、テーブルマナーは守らなければならない。

なぜ「バイキング」が「食べ放題」になったのか？

それは、1957年に帝国ホテル支配人の犬丸徹三という人が、旅先のデンマークで目にしたスウェーデン料理「スモーガスボード」がきっかけだと言われている。「スモーガスボード」というのはビュッフェ形式の食べ放題料理。そのまま日本に導入しようとしたのだが、名前が難しいという理由から違う名前を考えたい。当時、「バイキング」という映画が流行っており、その食事風景が豪快で印象的なものであったことから、流行に乗る形で「バイキング」と命名されたと伝えられている。そのため、バイキングというのは日本独自の料理スタイル名となった。ほぼビュッフェ形式であるが、「オーダーバイキング」と注文し放題のバイキングもある。(参照：<http://whatimi.blog135.fc2.com/blog-entry-703.html>)

ちなみに『ヴァイキング』(原題: The Vikings) は、1958年製作のアメリカ合衆国の映画である。アメリカでは1958年の6月28日、日本では同年の9月20日に公開された。TV放映、現在発売されているソフトのタイトルは『バイキング』だが、初回公開時は「ヴァイキング」と表記されていた。

4-2. 「バイキング料理」と「ビュッフェ」の種類

- ・ビュッフェレストラン (テーブルにある料理を好きに取って食べるレストラン)
- ・ビュッフェスタイルレストラン (同上)
- ・デザートビュッフェ (好きなデザートを取って食べるスタイル)
- ・朝食ビュッフェ (テーブルにある料理を好きに取って食べる朝食)
- ・ランチビュッフェ (ランチ料理を好きに取って食べるスタイル)
- ・イタリアンビュッフェ (イタリア料理を好きに取って食べるスタイル)
- ・ビュッフェ・バイキング (食べ放題がビュッフェ形式と明確にしたもの)
- ・バイキングレストラン (食べ放題のレストラン)
- ・ディナーバイキング (食べ放題の晩御飯)

ちなみに中国語では、「バイキング料理」「ビュッフェ」は、「自助餐」<zì zhù cān>となる。「自助餐」は、文字通り「料理を好きに取って食べる」ことである。

中華料理の回転テーブルは、それこそ自分の好きな料理を好きなだけ取って食べるのだが、中国から来たものではなく、発祥地は日本だったと言われている。場所は東京にある目黒雅叙園（めぐろがじょえん）という料亭で、日本で最初に総合結婚式場を考案した店として知られている。創業者である細川力蔵氏が、1931年に料亭の大衆化を目指して立ち上げたのが目黒雅叙園である。しかし、同じ時期にイギリスでも回転テーブルのようなものが存在していたようで、どちらが早いかについては断定できないようだ。（「意外に役立つ食べ物雑学」雑学研究家 安田泰淳 <http://www.cocoro-skip.com/eat/150063.html>）

4-3. 通じないカタカナ英語としての「バイキング料理」

外来語とは、他の言語から借用し、自国語と同様に使用するようになった語を指し、借用語とも言う。日本語では、広義には中国伝来の漢語も含まれるが、狭義には、主として欧米諸国から入ってきた語を言う。一般にカタカナで表記される語が多いが、「バイキング料理」の意味での「バイキング」は、通じないカタカナ英語になる。

松本(2001)は、「バイキング(Viking)とは、8世紀から10世紀にかけてヨーロッパを戦慄させたスカンジナビア系の侵略者。そんな民族など、朝から会いたくもない—まして食いたくはない」としている。同時通訳者として活躍した同氏は、バイキング(Viking)では、料理のこととしては通じないとして、アメリカ人向けには次のように表現することを薦めている。

I love buffet style meals. (バイキング式の食事は好きです)

That hotel has a buffet breakfast every morning.

(あのホテルは毎朝バイキング式の朝食を出している)

Which do you prefer, the buffet or ordering from the menu?

(バイキング式とメニューから頼むのとどちらが好きですか)

さらに、松本(2001)は、イギリス人向けに次のような例文を示している。

I am in favour of buffet-style breakfasts, and I think the hotel staffs are too—

It saves them a lot of work. (バイキング式の朝食は好きです。ホテルのスタッフにとっても好ましいはずです。—手間が省けますから)

アメリカ英語の例文にもイギリス英語の例文にも「バイキング式の朝食」の例が出ているが、北欧の前菜<smörgåsbord>が日本の「バイキング料理」の元になっているためであろうか。「バイキング式の朝食」には、確かにメイン料理の前菜程度のものもあるが、和食用と洋食用のボリュームたっぷりの料理を選べるものもある。

4-4. 「バイキング料理」と「食品ロス」

外国人日本語学習者を対象とした日本語能力試験の問題集にも「バイキング料理」にまつわる問題が見られる。最上級のN1レベルの下のN2レベルの問題で、次の文章を読ませて、(1)～(3)の選択肢の中から内容が同じ文を選ばせる問題である。

「私はよくホテルを利用する。人件費の節約からか、レストランはバイキング形式にしているところが多い。この間もあるホテルで夕食に下りていくと、トレーを渡され、『お好きなだけお取りくださ

い』と言われた。朝食ならともかく、夕食までバイキングとは…。』

つまり、「人件費の節約からか…」と最後の「朝食ならともかく、夕食までバイキングとは…。』という言いさし文から判断して、「筆者はバイキングはいい食事のスタイルだとは思っていない」という正解文を他の錯乱肢の中から選ばせる問題となっている。(注1)

「バイキング料理」は、この問題文に見られるような「人件費の節約」だけでなく、次のように「食品ロス」の観点からも経営者側にメリットがあるようである。

「本来のレストランであればいつ注文を受けてもいいように、在庫を多めに用意しておく必要があるが、この場合注文が入らなかった時には大量の在庫が発生してしまう。テーブルに出ない食材は廃棄され、仕入れに要した原価はムダになってしまうのだ。しかしバイキングならばあらかじめ限られたメニューのみを用意しておけば済むので仕入れコストを低減でき、さらに大量仕入れによるディスカウントも得られるのだ。」(注2)

バイキング式の立食パーティーでも大量の食材が食べ残されている場合もあるので、バイキング式とメニューから頼むのとどちらが「食品ロス」を少なくできるのか、検討する必要があるだろう。「食品ロス」とは、食べられるのに捨てられてしまう食品を言う。「食品ロス」を削減して、食品廃棄物の発生を減らしていくこともゴミ問題の観点から重要である。

もちろん、「バイキングはたくさん食べられるのでいい」と思っている人もいる。

セイン(2001)は、「セルフサービスの食べ放題は、**buffet-style restaurant**、略して **buffet** です。**All-you-can-eat restaurant** も使われますが、これはどちらかと言うと「食べ放題」のニュアンスが強い言葉」としている。

米国出身の同氏は、次のような例文を示している。

Is this an all-you-can-eat restaurant? (このレストランはバイキングですか?)

もしかするとひかえめな「朝食バイキング」は、<buffet style>で、たらふく食べる「食べ放題」の夕食は、<all-you-can-eat restaurant>と使い分けているのかもしれない。

いずれにせよ欧米系の人からは「ホテルの朝食はバイキングだった」は「ホテルの朝食は海賊だった」と解釈され、意味不明となる。

5. おわりに

ミニマル・ペアの「ハイキング」と「バイキング」について見てきたが、「ペンチ」と「ベンチ」など外国語や外来語だけでなく、「天地(てんち)」と「電池(でんち)」などのミニマル・ペアにおいても加齢とともに日本人の高齢者にも聞き分けにくくなるという問題もある。(注3)

カタカナ表記の外来語は、欧米系の言語からの借用語で、欧米系の外国人にはわかりやすいと思われるが、「バイキング」のように原語とは異なった意味で使われたり、「ワンゲル」「バスハイク」「ラジカセ」「アポ」「プレゼン」などのように日本式に省略されたりすると外国人の日本語学習者にはとても難しく感じられるようである。

かつて『ヴァイキング』(原題: **The Vikings**) という映画のタイトルがあったように、料理と切り離す場合には「ヴァイキング」として、料理名の「バイキング」と書き分ける方法もあるだろう。ミャンマー出身の留学生は次のように問いかけている。

「『バイキング』と聞いた瞬間、<Biking>と間違ってしまう。日本の<V>との発音の区別はないと思うが、実は区別しているのでしょうか」。

このような疑問と混乱がある以上、「ヴァイキング」と「バイキング」を書き分けるなどの工夫があ

ってもいいのではないかと思われる。

外来語は、原語と比べると「意味の縮小」や「意味の屈折」などが見られるが、料理の「バイキング」などは、その範囲を超えた変容が見られる。同様の例がほかにも見られると思われるが、今後さらに用例を採取して、検討を加えたい。

(注1) JLCI 新試験研究会・代表松本節子(2013)『実力アップ！日本語能力試験 N2 読む(文章の文法・読解)』より

(注2) <http://news.livedoor.com/article/detail/4465242/>高級ホテルのバイキングは儲かるのか？儲けのカラクリは意外なところにあった。

(注3) <http://juntarouletter.hateblo.jp/entry/2017/12/07/130827>【NHK ガッテン】難聴が認知症の原因？運動と聴力チェックで脳を守ろう！「ベンチ」この言葉を聞いて、きちんと聞き取れるかどうか、です。これを「ベンチ」や「でんち」「でんき」と聞き取ってしまう人は、難聴の恐れがあります。これは母音と子音の音の違いにあります。母音(あいうえお行)は音が低く、子音は音が高いため、子音の音を聞き取れない人は、高い音を聞き取る感覚毛が抜け落ちてしまっている恐れがあります。

<参考文献>

セイン, デビッド(David A. Thayne, 2012)『日本人がつい間違える NG カタカナ英語』

主婦と生活者

松本道弘(2001)『通じないカタカナ英語』DHC

<追記>

本稿を作成するにあたっては、インターネット上から多くの情報を採取した。特にウィキペディアからの引用や参照が多いのは、最新の情報が得られやすいという点にある。インターネット上の情報を用いるのには、賛否両論があろうが、本稿のようなテーマでは、厳密性よりも多角的なものの見方を優先したほうがよいと判断し、採用した。

なお、本稿は草稿段階で、本田義昭氏(元山口大学人文学部教授)と石井智子氏(山口大学学生自主活動ルームコーディネーター)に丁寧に見ていただき、貴重な情報提供と助言をいただいた。この場をお借りして、感謝の意を表したい。

また、2017年度後期共通教育「日本語IVB」クラスの留学生からの率直な意見やアイデアをいただいた。本文中の図1の紅葉狩りの写真についても被写体となった謝霞氏からも掲載の快諾を得た。その他にも本稿の内容を一緒に検討していただいた方々に感謝したい。